

# 六 花



俳句雑誌りつか

2013 (平成25年)

cover design Yuna Mizumo

か かき氷決めしごとくに頭痛来し  
じ 自墮落な独りカラオケ夜の短  
る 留守番が猫とは鮎をどうしやう  
と 遠山の暮渋りある螢かな  
き 切刻み煮湯に鱧を咲かせけり  
と 宙づりの毛虫はグレー・ザムザ  
は 花火から戻りし足を洗はさる  
で 電球に揃ひ浴衣の手をかざす  
な 名にし負ふ千里<sup>り</sup>浜泊り烏賊釣火  
い 碑の字の白さあり早梅雨

六月十二日

か 髪 の 毛 を 天 牛 虫 に 抜 き に け り  
と と ン ば う に き び す を 返 す 真 鯉 可 那  
た 滝 道 に 夜 の 蝮 の 匂 ひ け り  
づ づ き づ き と 疼 く 花 火 の 指 切 り は  
ね ね ぢ れ ゐ る 根 を 伝 つ て 滴 り ぬ  
ら 来 年 も 絶 对 来 や う 川 下 り  
る 流 人 よ り ま し か と 土 用 波 に 立 つ  
そ 剃 り 捨 つ る つ も り は あ ら じ 更 衣  
れ 練 乳 に 苺 溺 れ て し ま ひ け り  
は 針 は 目 と 耳 を 持 ち を り 更 衣

り 竜宮にゐしなら昼寝し直さむ  
ん 雲海の城址に竹の梯子かな  
ご 胡麻豆腐ぬらりのんどへ川床料理  
の 野狐を払うて鼻のけたたまし  
そ 空をよむ早つづきの額かな  
れ 練習のユース部へと真ま桑か瓜うり  
と 父さんの日ねと夜中のメールかな  
も 藻の花を流るる水の揺れにけり  
ヒ ヒヒよりも赤ら顔なり夏遍路  
ト 時計草午後に入りをりもうあかん  
の のけぞつて螢の道をたどりけり

# 躓けるたび流觴の速まりぬ

笹村 政子

つまずけるたびりゅうしょうのはやまりぬ さとむらまさこ

木漏日を曲水の盃くぐりゆく

亀の子に睡蓮の葉のありあまる

どの茎の菖蒲の花か風のあり

陵を遠巻きにして百千鳥

流觴とは「流觴曲水」の略で、折れ曲がった庭園の流れに杯を浮かべその杯が自分の前に来るまでに詩を作り、杯の酒を飲む遊び。掲句「躓けるたびに速まり」が眼目。躓（つまず）くというのは障害が起こって予定通りにゆかないこと。中断または停滞して物事を成就出来ない状態になること。だが掲句、蹴躓いたことよって却って弾みがつき速度が上がった。この現象を逆手にとって、宇宙ロケットの速度を上げて行く方法にも応用されている。「大悪起れば大善来たる」ピンチは最大のチャンスを生觴に見つけた。

# 輪の中に吾を入れたる春の鳶

藤生不二男

わのなかにわれをいれたるはるのとび ふじおふじお

春水のひたすら堰を越え行けり

一鳥のしづかに籠る椿かな

日暮るるを鶯の鳴き渡りけり

藤房の垂るる瀬音のかすかなり

春のゆったりと、のんびりと飛ぶ鳶の笛を聞きながら麗らげき気分を満喫していた。ふと気がついたら、自らが鳶の描く輪の中に入れられていることに愕然とする。鳶は私を標的のように輪を描き、照準を合わせ（ロックオン）しているのではないか。とんびは鳴き声も飛翔する姿ものどかに見えるが、鳶は本来猛禽類なのだった。と気付いた驚き。輪を描く鳶の句や歌はたくさんある。がその輪の中に吾が入れられているという表現を知らない。「吾が入っている」というのでなく鳶が「吾を入れたる」という驚きが鮮烈。

雪 卿 集

ちらちら雪

志方章子

紅梅に飛び込む雨の雀かな  
海昏れてちらちら雪となりてきし  
床の間の桜括らる雛の家  
鮎子を炊くに倦みたる嫁姑  
春昼といふは得体のしれぬ闇

糸ざくら

佐津のぼる

噴煙のなかばで曲り涅槃変  
糸ざくらその影のまたゆるき揺れ  
地にとどく枝垂れが自慢庭桜  
蝶吹かれ風がひかりに変りけり  
春田べりふはりと鷺を発たせけり

せつ じゅ しゅう  
雪 樹 集

蜘蛛の巣

溝渕 弘志

初螢母上は目を凝らさるる  
薔薇園に老婆微笑みをられけり  
蜘蛛の巣に七色の玉雨上がり  
瀬の音をかき消しにけり蝉時雨  
ノツクする腹を減らせてゐる金魚

植田直し

市川伊團次

口紐の纏れを直す鯉幟  
鯉幟垂れたる尻尾掴まりぬ  
褪せたるがよからむ真鯉の幟かな  
風ありて朝日に映ゆる鯉幟  
黙々と早苗直しをしてをりぬ



# 蛍雪譚



六甲

二十五年六月号選後に

日輪を追ひし山火の夜の舌

梶浦玲良子

「山火」の訓みによつて意味が違つてくる。「さんか」なら山火事。「やまび」なら春先に里近くの山を焼く火のこと。掲句の場合は「やまび」。山焼きが日中に終われず夜になつても燃えている状態。日があるうちには、天空の目を追うように燃え登つていた炎の先が、夜は蛇のようにちろちろ伸ばす舌になる。昼間は煙りが目立ち、夜は炎の際立つ光景に変わる。怪しく不気味な炎の舌が伸びるのである。舌は火の湿りを帯びて。

うまごやし野にゆるやかな里の景

6月の野には首蓆の花が咲き乱れるころ子規の「六月を綺麗な風の吹くことよ」を思いおこす。この句の「を」に注目する人は少なく、大方の人が「六月に」で鑑賞してしまう。「を」はたしかに通過の「を」という機能をもつた助詞だけれど、もう一つ「六月というものを」の「というもの」を省略した「を」でもあるはず。梅雨の晴れ間の乾きすぎぬ心地よい風で、特に罹病の微熱っぽい身体を癒してくれる風なのだ。いくら身体が熱っぽいからといって冷たくてもいけない。青草を吹いてくる風でなければいけない。目で見える風の光景だけでなく五官で綺麗だと感じられる風。ちなみに首蓆とシロツメグサ(クローバ)は別の種類。

# 六花集

花時雨齒科の寝椅子に綿嚙んで  
花診を終へて菜の花明りかな  
検診の腕まくりして瓦斯つけ  
清明の腕まくりして瓦斯つけ  
車椅子の腕まくりして瓦斯つけ  
当然が当然でなく春惜しむ  
花の枝重なり合うて色をなす  
桜の蕊降るや露天の古書の遅  
みさささぎのや濠の内なる遅  
嘖や峠の祠閉ぢしま  
桜散る行者道へと迷ひ込み

大内 幸子

平居 滯子

加納 淳子

廃屋や薔薇の垣根の華やか  
嵐を部屋に微睡みに  
蛩の火手踏の虫かごの闇の  
揚羽の蝶雑踏の虫かごの闇の  
薔薇の棘指先の傷はあなたに  
薔薇の棘指先の傷はあなたに